

国語教育の枠組みを考える

第2回 国語ワーキンググループ資料

2025年10月24日（金）

石黒 圭（国立国語研究所）

国語教育の枠組み

- 国語教育の2本柱

言語技術教育（運用・論理）：表現、理解、思考etc.

言語文化教育（教養・感性）：文学、古典、詩歌etc.

- 言語教育v.s文学教育として把握されることも多い（幸田2021）。戦後の国語教育の歴史は両者のせめぎ合いにあったといつてよい。
- 優れたコンテンツに触れること（言語文化教育）、それをもとに自らの言語運用力を養うこと（言語技術教育）は、**どちらも重要**。前回の学習指導要領は、この2本柱が明確になった非常に優れた整理であり、維持・継承したいと考える。
- 発表者はおもに後者、言語技術教育の立場から、議論を行う。

国語科の目的は何か

- 言語技術教育の立場から考える国語科の目的は、**コミュニケーション力**と**思考力**を獲得することにより、子どもたちの生きる力、とりわけ社会参加能力を育成することにある。
- **コミュニケーション力**とは、四技能、すなわち「読む」「書く」「聞く」「話す」力を指す。
- **思考力**とは、言葉を使って考え、それを形にする力を指す。思考力は目に見えないが、「書く」「話す」のほか、「話し合う」で言語化される。「考える」ことは頭のなかでの「話し合い」である。
- したがって、国語科では「読む」「書く」「聞く」「話す」「話し合う」（＝「考える」）の5要素が必須となる。

国語教育で大切な二つの連続性

- 国語教育を大局的に考えるうえで大切なのは、**連続性**である。
- **第一の連続性**は、民主主義社会の一員としての社会参加能力を育成するという目的から考えた**成長の連続性**である。

幼保⇒小学校前半⇒小学校後半⇒中学校⇒高校⇒大学／社会

- 書き言葉能力で言うと、成人したとき、生活日本語（**物語文**）、学術日本語（**意見文**）、ビジネス日本語（**説明文**）の三つの能力が必要である（アーティキュレーションも視野に）。
- **第二の連続性**は、**歴史的連続性**である。先行き不透明な時代だからこそ、時代を超えた「読み」「書き」教育の継承が重要。教育は、時代を意識しつつも、「**変化に強い教育**」を目指す必要がある。

言語活動の分類（四技能＋1の前提）

	音声	文字
一方向 (計画性強)	準備型独話…講義、講演、 談話etc.	準備型文章…小説・論文・ 報告etc.
一方向 (計画性弱)	即興型独話…挨拶、自己紹 介、思い出話etc.	即興型文章…コメント・ツ イートetc.
双方向 (計画性強)	準備型対話…会議、取材、 面接etc.	準備型やりとり…手紙、E メールetc.
双方向 (計画性弱)	即興型対話…会話、雑談、 世間話etc.	即興型やりとり…LINE、 チャットetc.

「読む」

- 読むことは質が大事：

- ①**正確に読む**（精読） 一書かれたことを正確に読む。
- ②**深く読む**（推論） 一書いてあることを手がかりに、書かれていないことを深く読む。
- ③**分析的に読む**（ネガティブ・リテラシー） 一書いてあることを冷静かつ分析的に読み、書いていないことを感情的に読みこまない。
- ④**主体的に読む**（活用） 一書いてあることを批判的かつ主体的に読み、自己の表現活動に生かす。

- 読むことは量も大事：読解力・語彙力の育成のために、**読書を積極的に行うしかけを施す**ことが必要。

「書く」

- 「書く」活動を体系化することが喫緊の課題。
- 体系化の前提として、ジャンルの規定が必要（石黒2025）。
- 体系化のためには、書く段階（執筆プロセス）の整理が必要。
 - ①表出段階（自己の考えに形を与える）
 - ②整理段階（自己の考えを構造化する）
 - ③伝達段階（読み手にわかるように調整する）
- 生成AIの全盛の時代だからこそ、書くことに力を入れる教育が大事。生成AIとは独立に自らの思考の型をみがくことが肝要（渡邊2024）。
- 発信力を鍛えるため、扱うべき時間数を決めて書かせることが重要。

「聞く」

- 「聞く」というのは捉えどころのない活動であるが、大事ななのは、**話している人の話のポイントを聞き出し、記録をすること**である。
- 具体的なプログラムとして次のような活動が考えられる。
 - ① **ノートテイキング**：講義のような準備型独話の要点を見抜き、構造化する練習を、ノートを取ることで行う（他教科にも好影響）。
 - ② **議事録の作成**：会議のような機能型対話の流れを押さえ、議事録を作成する（話し合いの記録を取ることで考える力を育む）。
 - ③ **インタビューの実践**：インタビューのような機能型対話で聞き手になれるよう、準備をして取材を行う（話を引きだす力）。

「話す」

- 「書く」と同様に「話す」という活動の体系化が必要。そのさい、文化庁の2018年の報告『[分かり合うための言語コミュニケーション（報告）](#)』が参考になる。
- 同報告書は、異なる背景を持つ者同士が情報や感情を適切にやりとりし、相互理解を深めていく技術を「正確さ」「わかりやすさ」「ふさわしさ」「敬意と親しさ」の四つの観点から論じたもので、
①「正確に話す」、②「わかりやすく話す」、③「場に合わせた話す」、④「相手と適切な距離で話す」といった整理が可能になる。
- 具体的な活動としては、アウトラインを作って発表するなど、準備型独話が基本となる。

「話し合う」

- 思考の言語を鍛えるには、形にならないことを形にする努力を重ね、
考えていることを徐々に形にしていくことが必要（石黒・鳥2024）
⇒ 言語化教育
- 自己との対話：自分の頭で考え、考えた内容をメモにする。
- 資料との対話：収集した資料と向き合い、自己の考えを深める。
- 他者との対話：グループで話し合って、形にした自己の考えの共有を図り、第三者の目から自己の考えを批判的に吟味し、改善する。
- 全体との対話：上記の過程をつうじてまとめた内容を、全体のなかで発表し、さらなるフィードバックを得て完成させる。

おわりに

- 言語技術教育（国語教育）の目的は、子どもたちの主体性を生かしたコミュニケーション力と思考力の育成にある。
- コミュニケーション力の育成では、「読む」「書く」「話す」「聞く」の学習項目の整理と体系化、具体的な活動を示すことが必要。
- 思考力の育成では、思考の基軸となる言語で主体的に考える力を育成することが重要（佐藤2024）。「話し合う」を中心に、子どもたちの「考える力」と「考えを言語化する力」を育みたい。
- 子どもたちに「無理させない」「楽しい」教育が大事。必要最小限の枠組みを示し、子どもたちが主体となれる表現の教室を作りたい。

参考文献

- 石黒圭（2025）『読み手に届く 文章技術』ちくま書房
- 石黒圭・烏日哲編（2020）『どうすれば論文・レポートが書けるようになるか ―学習者から学ぶピア・レスポンス授業の科学―』ココ出版
- 幸田国広（2021）『国語教育は文学をどう扱ってきたのか』大修館書店
- 佐藤宗大（2024）『国語教育における「主体」と「ことばにならない何か』』ひつじ書房
- 渡邊雅子（2024）『論理的思考とは何か』岩波書店